

I will increase average life expectancy in this world.

この世界の平均寿命を
頑張っ**て**伸ばします。

2

まさちち

masachichi

若様

謎のイケメン王子様。
ヒデノブに興味を持っている。

ポール

凌腕薬師のおじいちゃん。

ハルナ

孤児その2。
優しく面倒見の良い女の子。

トラン

孤児その3。
クールで、ちょっと大人びた少年。

主な登場人物

characters

キャロライン

ヒデノブのもとを訪れた
謎のお嬢様。

ヒデノブ

本作の主人公。手に入れた回復魔法と
診断スキルで、この世界の平均寿命を
伸ばすべく奮闘する。

ゲン

孤児その1。やんちゃで仲間思い。
孤児たちのリーダー的存在。

ミラ

孤児その4。エルフの少女で、
ヒデノブの一番弟子。左目にライフミスト
というスキルを持つ。

◇
◇
◇

俺、ヒデこと田中英信たなかひでのぶは、取引先に向かうため電車を待っているとき、線路に落ちそうな子供を助けて死んでしまった。

でも不思議と意識はあつて——目を開けるとどストライクの美人がいたのである。

その美人さんはなんと地球の女神様らしい。どうやら俺に頼みがあるみたいで、詳しく聞いてみると、アルデンドという異世界の平均寿命を伸ばしてほしいとのことだった。

それから女神様に回復魔法のスキルとかもらってアルデンドに飛ばされた俺は、小さな女の子に会った。

この子がアルデンドの女神、エリル様。

まあ俺は、チヨロイン女神様って呼んでいるけど。

ちなみに、エリル様には俺が見た姿とは別に営業用の姿があり、それは大変お美しいらしい。見たことないけどね。

そんなチヨロイン女神様だけど、ちゃんと神様というだけあって、俺にスキルを二つもくれた。

まあ、一つ目のスキルはパーティを組んだら俺がもらえる経験値は半分になって、パーティメンバーの経験値は2倍になるというはずれスキルだったんだけどさ。

けど、二つ目のスキル「診断」は、回復魔法との相性が抜群で、これのおかげでいろいろな人を治すことができた。

そうそう、初めて訪れた街の冒険者ギルドで身分登録を済ませようとしたとき、そのギルマスに誘われてギルド内で診療所を開くことになったんだ。すぐ急患が来たり、ゴブリンの群れに襲われた村の救護に向かったりとてんやわんやだったよ。

でもそのおかげで、孤児で冒険者のゲン、トラン、ハルナ、そして我が弟子になったエルフのミラと知り合えた。

気がかりと言えば、この前若様って呼ばれている、ずいぶん身分の高そうな人が診療所に来たんだよね。スルスって名乗っていたけど、それが本当の名前なのかも怪しくて……面倒なことにならないといいけど。

あと、ゲンたちの孤児院にお邪魔して、院長先生やアン先生の病気を治したんだ。院長先生、あのまま病気が進行していたら、孤児院の子たち全員が悲しむことになっていたと思うから、治せて本当に良かった。

やれやれ、ともかくいろいろあつて疲れたよ……

1 装備

日が昇ると同時に目が覚めた。

俺の周りにはたたくさんの子供たちが眠っている。昨日は結局、孤児院の子供部屋に毛布だの布団だのいろいろ持ってきて、みんな一緒に寝たんだった。

「子供って体温高いな、ちょっと熱くなってきた」

子供たちを起こさないように引き剥がしつつ立ち上がり、靴を履いて孤児院から出る。それから庭に出て、畑の前にやってきた。

作物がしなびていて、とても良い環境とは言えない感じだ。

スキル「診断」を発動する。

『なんですか、マスター』

『この畑、こないだの祝福までいなくても、なんとか元気にできないかな？』

『できますよ、10年くらいなら』

『……言っただけでできるんだ。やってくれる？』

『マスターの仰せのままに』

そういえば、診断スキルと会話できるようになったんだよね。
ちなみにこないだの祝福というのは、酔った俺が周囲にヒールをかけまくったら、その場所が豊穡じゆうの土地になってしまったという出来事。それをここでもできないかな、と思ったわけだ。
畑に向かって手をかざすと、畑がキラキラと輝きます。しばらくその光景を眺めていたら、光はゆっくりと収まっていった。

『終了です』

《ご苦労様》

いつの間にか、ミラとハルナが隣に来ていた。二人が不思議そうな顔で話しかけてくる。

「ヒデ兄師匠、今のキラキラしたのなに？」

「あときの光みたい」

診断スキルを閉じて、俺は二人に顔を向ける。

「おはよう、ミラ、ハルナ」

「おはようございます、ヒデ兄師匠」

「ヒデ兄、おはよう」

続いて、ゲンとトランもやってきた。俺はみんなに、俺が何をしたのかを説明してやる。

「この畑を少しだけ元気にする魔法をかけたんだよ」

ミラが不安そうな表情を見せる。

「病気だったの？」

「いや、これから頑張ってもらおうからね」

心配するなという気持ちを込めて、ミラの頭を撫でてあげる。

「良かった」

ミラの表情が和らいだ。安心したみたいだな。

「ふん。あ、忘れてた。ごはんできたって言いに来たんだった」

そう言うトランは、畑のことなど興味なさげな様子だ。

「わかった、帰ろう」

俺たちは畑をあとし、孤児院へ戻るのだった。

朝ごはんは、スープにパスタみたいなのが入っている料理。なかなか美味しかった。

今日は、ゲンたちと一緒にギルドに向かうことにした。

出発しようとする俺たちを、院のみんながお見送りしてくれる。

子供たちにまとわりつかれていると、院長先生が少し申し訳なさそうな顔をして「お願いがあるのですが……」と話しかけてきた。

「ヒデさんからいただいた小麦粉を、他の方にも分けてあげても良いでしょうか？」
「ん、はい、もちろん」

許可してあげると、院長先生が笑顔を見せる。

「ありがとうございます。この辺りには、片親になってしまったり、働けなくなってしまうたりした人がたくさんいます。助け合っていないと生きていけないものですから」

なるほどな。困っている人を助けるのは俺としても大賛成だ。それにしても、働けなくなってしまう人というのが気になる……

それから院長先生にお礼を言われ、送り出される。

「気をつけて行ってらっしゃい」

「はい、いつてきます。じゃ、また来るよ。みんなさようなら」

「「「「さようなら、また来てね、ヒデ兄ちゃま」」」」」

この前、俺が自分のことを「ヒデ兄ちゃま」と言い間違えてしまったせいで、子供たちの間で「兄ちゃま」呼びが定着してしまった。



見えなくなるまで手を振り続けてくれた子供たち。そんな彼らとの別れを惜しみつつ、院長先生の言っていたことについてゲンに尋ねてみる。

「こちら辺に、働けない人って多いの？」

「冒険者崩れとか多いかも。あと、旦那^{だんな}さんを亡くした奥さんとか子供とかが、ここいらに来たっという場合もあるよ」

なるほど、近くにスラム街みたいなものがあるのかな。

男なら怪我^{けが}が治れば冒険者に復帰できるだろうけど、独り身の女性の場合は働く場所に苦労しそうだ。この世界、男女格差が酷いってわけじゃないけど、なんとなくそんな気がする。

「ふむ、問題はシングルマザーのほうか」

「シン？ ヒデ兄、何それ？」

「まあまあ、ゲンには関係ない話だ。働く場所か」

ゲンに説明するのはややこしそうなのでごまかしておくとして、何か考えとかなないとなく。

思考を巡らせているといつの間にかギルドに到着した。入り口の前には、青い顔色をした冒険者たちがゾンビのように倒れている。

「ヒデ、遅い、ウブ」

「頼む、早く」

「うう、死ぬ」

「ZZZ……」

はい、いつもどおりの光景です。

「なんか日に日に、二日酔いの人たちが増えてない？ はい、集まって。プットアウト（広範囲）」

状態回復の魔法「プットアウト」をかけると、ゾンビの集団が光に包まれていった。

「あゝ、生き返る」

「これこれ」

「もゝこれがないと生きていけない」

「ZZZ……」

ゾロゾロと帰っていく冒険者たちに、念のため言っておく。

「はい、いつものように魔法球まほうきゅうにカードを当ててね」

ちゃんと聞こえたかな。魔法球というのは、診断料を徴収してくれる水晶で、カードを当てるだけでお金の支払いが済んでしまうという優れ物なのだ。

それはさておき、ゲンたちに今後の予定を聞いてみると――

「装備を整えようと思つてさ」

「鍛冶屋横丁の武器屋に行こうかなつて」

「今度のランクアップ試験までには、そろえたいしね」

順番に答えてくれるゲン、トラン、ハルナ。いつものように仕事がないか聞いてみたら、今日は休みとのこと。

この展開って、ファンタジーの定番、「チュートリアル・武具を装備してみよう」じゃないか。

これは付いていくしかない！

「俺も行く！」

「診療所は平気なの？」

ゲンが心配そうな顔を向けてくる。

「大丈夫だよ。行き先を言っておくから」

ギルドに併設されている酒場のママさんに伝言を残しておけば、急患が出て連絡が来るだろう。ちなみに、ママさんって言ってもモヒカンの大男なんだけどね。

「じゃ、ギルドの前で待つて」

ゲンたちを置いて酒場に行くと、カウンターに疲れた顔をしたママさんがいたので、鍛冶屋横丁に行く伝える。

「徹夜明けの疲れた顔をヒデちゃんに見られて恥ずかし」

そう言つてママさんは、ゴツイ両手で顔を隠した。

「いつもと大して変わりませんよ」

そう励ましてあげて、俺は酒場をあとにする。

「お待たせ、行こうか」

ウキウキな感じでゲンたちと合流すると、ゲンが冷静に尋ねてくる。

「鍛冶屋横丁で、ヒデ兄は何買うの？」

「ん、決めてはないけど、剣とか欲しいよね」

そう答えると、なぜかゲンは吹き出しそうになっていた。

「ヒデ兄、使えないじゃん」

「そうだけど欲しいの！ もうヒノキの棒と並んで5ゴールドくらいで売られているナイフじゃ嫌なの！」

なんでゲンは俺は剣が使えないって思ってたんだよ。

「ヒノキの棒とか5ゴールドとか、たまにヒデ兄、訳わかんないこと言うよね」

おっと、ついつい熱くなってゲンを困らせてしまった。

話を戻さなければ。

「まあまあ。ところでゲンたちは何を買うんだよ」

「俺はロングソードかな。両手剣として使おうと思ってる」

トラン、ハルナが続く。

「僕は短剣。持ちやすかったら、二刀流でいくのも良いかな」

「私は遠距離武器。弓とかかな。でも、矢が高くつきそうなんだけど」

おお、三人ともカッチョイイ。ミラは冒険者の活動をしないから武器は買わないみたいだ。

よし、俺の希望は……

「そうだな。俺もやっぱり両手剣で一気にダメージを稼ぎたいかな」

「ヒデ兄みたいなのが、両手剣売ってもらえるわけじゃないじゃん。危なっかしいもん」

「まあまあ、店に着けばわかるって」

「そうそう、おやっさんが売ってくれるわけないよ」

ゲン、トラン、ハルナが何か言いたげな視線を俺に向けているが、そんな子供たちをスルーして、俺は先頭に行く。

「おーい、早く行こうぜ、置いてっちゃうぞ」

「ヒデ兄、テンションおかしくない？」

「なんかね。ニコニコしてるのはいつものことなんだけど、なんか変だよ」
変ってなんだよ！

◇ ◇ ◇

鍛冶屋横丁に着いた。

武器屋や防具屋があるだけでなく、至るところで開かれている露店では、調理器具や釘くぎみたいな小物まで並べられていた。

独特の雰囲気は圧倒されながら、俺はつぶやく。

「なんかすごい活気があるところだね」

「この街のほとんどの鍛冶屋が、ここに集まっているからね」

「お、この辺りに詳しいっぽいな。」

「ほほ、買う店とか決まってるのか？」

「うん、こっちの道の一つ奥に入って、あそこだよ」

「ゲンたちに案内されて裏路地に入ると、古ぼけた建物があった。おお、なんか隠れた名店っぽい。中に入ると、店内にはとこ狭しと品物が置かれている。俺は興奮しながら店の中を歩き回った。」

「おお、フル装備の甲冑かぢうが飾られている。盾でけ〜」

「ちよ、ヒデ兄、ウロウロしたら危ないから」

「え、見ろよこれ。デカいよ。誰が使うのこんな剣？」

「注意してくるゲンをスルーして、そんなふうにはしゃいでいると……」

「店の中でウロチョロするんじゃないねー！」

「ドスの利いた声が響いてきた。」

「店の奥からいかついおっさんが現れると、ゲンが俺にそと耳打ちしてくる。」

「ほら、怒られた。ここのおやっさん怖いんだから」

「お前、そういうことは早く言えよ」

「ヒデ兄、全然話聞いてくれなかったじゃん」

「う、ゴメン」

「おやっさんが俺をちらりと見る。それから、ゲンたちに視線を移した。」

「ん、なんだ。エミリアのところのガキどもか」

「エミリアというのは孤児院の院長さんだったっけな。」

「ゲンがおやっさんに挨拶する。」

「おはよう、おやっさん。今日は装備を買いに来たんだ」

「なんだ、金貯まったのか？」

「えへんと胸を張るゲン。」

「うん、もちろん。次のランクアップ試験までにはそろえたいんだ」

「どれどれ、ガキ1はこのロングソードだよな」

「おやっさんが、子供が持つにはやや大ぶりの剣を取り出す。」

「名前覚えてよ、ゲンだよ。剣は合ってるけど」

「めんどくせえ」

おやつさんはフンと鼻を鳴らすと、今度はトランのほうに視線を向けた。

「ガキ2はどうすんだ？ 二刀流でいくのか？」

「うゝん、一つはこないだの短剣で良いんだけどな」

トランが腕を組んで考え込んでみると、おやつさんが一本の剣を取り出して見せる。

「これなんかどうだ？ 昨日弟子が打った新作だ」

「おお、いいね。この手のガード付いてるとことか」

トランはさっそく飛びついて、その剣に触れる。

「叩きが少し甘い、まあ良い出来だ」

嬉しそうなトランを見て、おやつさんも満足げだ。続いて、ハルナのほうに目を向ける。

「ガキ3は弓か？」

「うん、それで考えてるけど、良いのある？」

「ちよつとこれ引いてみる」

おやつさんがハルナに弓と矢を手渡す。ハルナはそれを引いて——目を丸くした。

「え、軽い。何これ？」

「ここここに魔道具を使ってるからな」

おやつさんが指差しながら説明すると、ハルナはうなずきながら聞いていたものの、突然、眉間

にしわを寄せた。

「もしかして、高くなっちゃおう？」

おやつさんは首を横に振る。どうやら普通の武器と変わらない値段でいらしい。ハルナはびよんぴょん跳ねて喜んだ。

「やった。じゃ、これにする。あと、護身用のナイフも」

「毎度。代金は前回言った金額で良いぞ」

「「ありがとうございます」」

「おう、毎度」

おう、トントントン拍子で武器をそろえちゃったぞ。新しい武器を手に入れたゲンたちは、ずっとニコニコとしている。

おやつさんは、ニヤリと笑ってそのまま奥に引っこ込もうとした。

「あれ！ おやつさん、俺には？ 俺へのお勧めは？」

「ちよつと、俺、忘れられてる！」

「ああ？ お前さんが持つのか？ 武器を？」

おやつさんがジロリと俺を睨んでくる。俺、何かおかしいこと言ったかな？

「うん、なんかカッコいいやつを……」

「うゝむ……」

……ジロジロ見てくるし、めっちゃ悩んでるぞ。

「あ、良いのがあったわ。ちよつと待ってな」

「ずいぶん長いこと考え込んでいたが、ようやく何か思いついてくれたらしい。おやっさんはそのまま奥に行ってしまった。

俺はワクワクしながら、おやっさんが戻ってくるのを待つ。

「なんだろうな？ やっぱり手堅く片手剣かな？ 俺としては両手剣が良いんだけどな。でも、おやっさんの見立てだしな」

ゲン、トラン、ハルナ、ミラが不審げな視線を向けてくる。

「ヒデ兄、あんまり期待しないほうが……」

「やっぱり、なんか変だよな？」

「うん、ちよつとね」

「ちよつとかな？」

「ここそ何か言っているけど、気にしない。

しばらくするとおやっさんが戻ってきた。

「おう、待たせたな。ほらよ」

おやっさんが持ってきた武器を受け取り、しみじみと確認する。これはまさしく日本に馴染み深いアレではないか！

ゲンがおやっさんにひそひそと話しかける。俺には聞こえない声で。

「……これ、剣には変わりないけど、頭に木が付くよね？」

「木剣って言うらしいぞ」

「何この形？ 鏢ぼって言うんだっけ？ ガード付いてないの？」

「ああ、この形が完成形だ。前に商売を辞めて田舎に帰る奴から、格安でまとめて買った中に入ってたんだ」

ゲンが、俺に意味ありげな視線を向けて言う。

「へ、なんかカッコイイね、ヒデ兄」

「うん、良いだろ。たしかに異世界で日本刀はお決まりだ。おやっさん、これをくれ」

おやっさんがニヤリと笑う。

「おお、良いぞ。タダでくれてやる」

「え、良いの？ なんか悪いな。あざっす。大事にするっす」

「おお、大事にしてくれ。他の武器は触るんじゃねえぞ」

「はい。そうだ、名前付けちゃおっかな」

カッコイイ武器を手に入れてウキウキ気分の俺。なんだか俺を見るゲンたちの視線が痛い、気にしない。

はしやく俺をよそに、四人集まってまたしても俺に聞こえないように小声で会話をはじめ。

「なんか、ヒデ兄が怖いんだけど」

「テンション高すぎて、付いていけないよ」

「おやっさんがあれ持ってきたの、ヒデ兄に刃物持たせないためだよな？」

「全然気づいてないみたいだけど」

四人の視線が俺に集まっていたけど、俺は手にした武器に見とれていた。

「あ、ところでお前ら、防具は？」

ふと我に返って四人に尋ねると、みんな首を横に振る。

「今は武器だけ。防具まで手が回らないよ」

代表して答えてくれたのはゲン。

なるほど。でもそれだと、いくら武器の性能が良くても危険じゃないか？ 何か良い防具ってないのかな。

「おやっさん、防具で一番のおすすめて何？」

「うん。そのガキどもに腕当^{うであ}てだな。使い勝手も良いぞ」

ぶっきらぼうにおやっさんは答える。

「じゃそれを、ミラは除くとして、三人分お願いします」

「ヒデ兄、いいの？」

ゲンが目を丸くする。

「まあ、俺からのお祝いだよ。武器を手に入れたお祝い」

俺の言葉に、おやっさんが感心したような表情を浮かべた。

「ほお。よし、俺がちょうど良いのを打ってやるっ！ ……と言いたいところだが、手が言うこと聞いてくれないんだよな」

ため息をつくおやっさん。

「ん、手がどうかしたんですか？」

「手首のところがな、最近じゃ何もしなくても痛くなりやがる」

そう言うとおやっさんは、辛そうに手首を擦^{こす}った。

「ちよつと診^みさせてもらっていいですか？」

俺がそう口にするのと、おやっさんは怪訝^{けげん}そうな表情を浮かべる。そんなおやっさんにトランが言う。

「おやっさん、診てもらえば？ ヒデ兄ならすぐ治してくれるよ」

「どういうことだ？」

ますます疑わしげな顔をするおやっさん。そういえば、俺の仕事のこととかちゃんと話してなかったな。

俺は、自己紹介をすることにした。

「あ、俺は冒険者ギルドで診療所をやっているヒデと言います」

診療所と聞いて、おやっさんは目を見開いた。とはいえ、まだ信用してくれているわけじゃないらしい。どこか値踏みするような視線を向けてくる。

「診療所ねえ。もし治ったら、タダでさっきの腕当て作ってやるよ」

「え、そんな約束して大丈夫ですか？」

「ああ、この手が治ればまた仕事ができるしな。治ればな」

念を押すように言うおやっさん。

これは得ができそうだな。

俺は悪い笑みを浮かべて、おやっさんを診断することにした。

「フフ、じゃ、診ますね。診断」

『手首の腱鞘に、酷い炎症があります』

《元に戻せる？》

『可能です。ただ、再発防止のために予防方法を教えておくことを提案します』

《了解》

現在の症状だけでなく、治したあとのことまで教えてくれたよ。なんて優秀！

ひとまず、おやっさんに伝えておこうかな。

「手首が酷い炎症を起こしてるみたいですね」

「そう、そこが一番痛いところなんだ」

「うん、治療はじめますね」

腱鞘、元に戻れ、戻れ。

ヒールによっておやっさんの手首がほんのり光り、しばらくして光は収束していった。これで治療は終わり。

「はい、ゆっくり動かしてみてください」

「もう終わったのか。あつたかくて気持ち良かったけど……ん？ 動くぞ。痛くねえ。おいおい、

本当かよ」

おやっさんは目をぼちくりさせて驚いている。

俺は診断に教えてもらった予防策も伝えておく。

「それで、この怪我は放っておくと、またなっちゃうんですよ。というわけで、予防の仕方を教えときますね」

俺はおやっさんに、手首の腱鞘炎を防ぐ体操を、身振りを交えて教えてあげた。

「お、おう、わかった。まったくスゲ〜な、兄ちゃんよ。どっかのジジイの薬なんかとは大違いだ」

「ん？ 薬？ 薬飲んでたんですか？」

「おう、これだ。もう必要ないから持ってきな」

「はあ。一応、もらっときます」

おやっさんから、緑色の液体が詰められたビンを受け取る。へえ、これがこの世界の薬なのか。

「それと、腕当ては任せとけ。スゲーの作ってやるぜ」

「本当に良いんですか？ ちゃんとお金払いますよ？」

タダになつたらラッキーと思つてたけど、やっぱり申し訳ない気もするな。

「あん？ 男に二言はねえよ」

おやっさんは風貌どおりの職人氣質のようだ。それじゃあお言葉に甘えちゃおうかな。

「わかりました。お願いします」

「そうだな、三日くれ。三日で仕上げるからよ」

おやっさんがゲンたちに笑みを向けると、ゲンたちはそろって頭を下げる。

「「おねがいます」」

なんだかこのおやっさん、ほっとくと無理しちやいそうなので、俺は念を押しておく。

「それとさっきの予防法、ちゃんとやってくださいね」

「わかったわかった」

「じゃ、三日後くらいに来ます」

「おう、じゃあな」

言うが早いか、おやっさんは奥に消えていった。すぐ防具作成に取りかかるんだろう。俺たちも武器屋をあとにすることにした。

2 再び若様(1)

「ふんふんふん」

「ヒデ兄、ものすごく機嫌だね」

武器屋からの帰り道。鼻歌を歌っている俺に、ゲンが声をかける。

「だって俺の剣、カッコイイだろ」

「あーうん。そうだねーカッコイイねえ」

「お、そうか、わかるか、わかっちゃうか、そうだろう、そうだろう」

調子に乗っていたら、露骨に嫌そうな顔をするトランとハルナ。

「なんだろ、この買ったばかりの武器でヒデ兄のこと、チョットだけ斬りたいんだけど」

「私も、弓の威力を試したくなった」

「え、ちよっと。ヒデ兄師匠逃げてー」

心配するミラの声を背に受けつつ歩いてみると、とある露店が目に入った。小物をメインに扱っ



ているみたいなんだけど……なんかいい感じの物が売ってるな。

「あ、そうだ。ミラには何も買ってなかったな。ここの小物屋さんで、何か買ってあげよう」

「いいの？　ありがとう！　ハルちゃん、行ってみよ」

「ハルナも好きな選んでいいぞ」

「本当？　ありがとう！」

嬉しそうに小物屋さんを覗くミラとハルナ。

「お、兄さん、優しいね。あ、お二人さん、欲しいアクセサリーが決まったら言ってね。サービ
スでエンチャントしてあげるから」

暇そうに店番をしていたイケメンの兄ちゃんが話しかけてきた。今の会話を聞かされていたみたい。
「エンチャントって、アクセサリーに付呪ふしほをするの？」

ちよつと気になったので聞いてみると、兄ちゃんが首を横に振る。

「いや、さすがにそこまでは無理だよ。エンチャントだから、一時的に効果があるくらいさ」

「へーそうなんだ、すぐできるの？」

「ああ、うちの商品ならどれでもできるよ。素材が良いからね」

フムフム、なんか怪しい気もするけど本当にできるのかな？　そうだ、診断で調べてみるか。

《どう、このアクセサリー》

『比較的魔法伝導の良い銀で、主に作られています』

《なるほど。だからエンチャントしやすいのか》

『はい。マスターなら付呪できますよ』

《え？ 俺ができるの？》

『この素材と質量ならランヒール、もしくは数回分のヒールが使えます』

《へーじゃあ、子供たちに持たせておくか。ありがとう》

診断から俺なら付呪できるとか言われてびっくりしたけど、とりあえずこの小物屋さんでエンチャントをかけてもらおう。ついでだし全員分買っちゃうかな。

「決まったか？ ゲンとトランも選んでいいよ」

「え、俺たちもいいの？」

「お祝いお祝い」

「やったー。どれにしようかな」

ミラとハルナに続いて、ゲンとトランも嬉しそうに小物を選びはじめた。

全員が選び終わるのに、結構時間を食った……

ゲンとトランは剣の形をしたネックレス。ハルナは蝶々の髪留め。ミラは花の髪留めを選んだ。

みんな、それぞれが元から持ってたアクセサリと同じじゃんと思ったんだけど、微妙にデザインが違っているらしい。

「お、決まったかい。じゃ、エンチャントするね」

イケメン兄ちゃんが四人の選んだ小物を受け取り、エンチャントをかけていく。

俺がお金を払うと、みんな身に着けてからそろってお礼を言ってきた。

「「「ありがとうヒデ兄（師匠）」」」

「どういたしまして」

ふと思いついて、ハルナからアクセサリを借りる。

付呪ってどうやるんだろ？ と思っただ。実際試してみると、うーん、なかなかうまくいかない。

ランヒール、ランヒール、ダメだ。えっと、この、銀の中に練り込む感じでランヒール！

俺の手の中で、髪留めが光り出した。

「うわ、びっくりした」

ゲンとハルナが俺の手元を覗き込んでくる。

「こっちのほうがびっくりだよ」

「ヒデ兄、何したの？」

んー、できてるかな？ 診断！

《どう？ できてる？》

『はい、お見事です。でも、どうして私を呼ばなかったんですか？ 付呪なら私ができますが』
《フフフ、自分でやるのも面白そうって思ってます》

付呪のやり方はだいたいわかった気がするな。

俺はランヒールを付与してあげた髪留めをハルナに渡す。

「はい、どうぞ」

「ありがとう」

「次、ゲンの貸してごらん……」

全員分やりました。

これからみんなは、武器の慣らし運転のために鍛練所たんれんじょに行く予定らしい。

「俺もこの風花雪月ふうかちやげつを慣らすかな？」

「はあ？ その木剣ぼっけんのこと？ 名前付けたの？」

そう言つてトランが眉間にしわを寄せる。

「うん、言いくかかったらフウ君でもいいぞ」

「いや、武器に名前とかどうなの？」

ハルナも呆れていた。

トランやハルナとは違い、ノリノリな様子なのはゲンだ。

「アリだな。さすがヒデ兄だ。俺のはマックスと名付けるぜ」

「お、ゲン君の子はマックス君ですか、良い名前ですね」

「ヒデ兄のフウ君も、なかなかだぜ」

「ワハハハハハ」

俺とゲンを見て、トランが呆れたように言う。

「ほうっておこう、関わるとめんどくさそうだ」

◇ ◇ ◇

そんなこんなでギルドに到着。

鍛錬所に行くと言うゲン、トラン、ハルナと別れ、ミラと一緒に診療所に向かおうとすると、扉の前で横から声をかけられた。

「ヒデ君、遅いよ。どこ行つてたの？」

そこにいたのは、スミスさん。

スムスさんは俺の診療所のお客さんで、つい先日、彼のお付きのヴァネッサさんという女騎士の目を治してあげたのだ。そうそう、ヴァネッサさんは彼のことを若様と呼んでいたから、たぶんスムスさん、貴族か王族か、とにかく偉い人だよね……

それはさておき、そのスムスさんの隣に壁があった。見覚えのない壁が。

……いや待て。よく見ると壁じゃなくてでっけ〜人だ。でかすぎて壁かと思っちゃったよ。

まあいいや、とにかく今はスムスさんだな。今日は何しに来たんだろ？

「あ、スムスさん、何かありましたか？」

「え、スムスって……あ、そうか。うん、スムスだよ」

あれ、なんか変な反応。やつぱり本当の名前じゃないのかも。ともかく、わざわざ俺に会いに来たってことは、ヴァネッサさんの目に不調とかあったのかな。

「今日は、ダニエル君が君にどうしても会いたいらしくて」

ん？ ダニエルって……このでっけ〜人間のこと!? 巨人族とか混じってたりするのかわ？ びっくりしてしまっただけ、とりあえず中に入れよう。

ダニエルさんが診療所に入るのを確認してから、スムスさんが入ってくる。ダニエルさんにどういう用なのか尋ねてみると、いきなり頭を下げてきた。

「はっ、ヴァネッサの怪我を治していただき、感謝の言葉もあります」

あまりの勢いに引いていると、ダニエルさんは顔を上げてさらに続ける。

「剣の鍛練中に起きたあの事故、それを起こしたのが自分でした」

あゝ、なるほど。そういうえばヴァネッサさんの目を治療したとき、剣の稽古中に傷を負ったって言ってたっけ。

「え〜と。あ、幼少の頃、彼女に怪我をさせたっていう人？」

「10年ぶりにヴァネッサの本当の笑顔を見たように思います。私は今まで、自分の未熟さを呪い続けていました。ヴァネッサの笑顔を奪った剣の感触が常に付きまとっていたのです」

真面目な表情で言うダニエルさん。

事故の責任を一人で背負って、ヴァネッサさんの笑顔を自分が奪ってしまったと思ってるみたい。だけど、俺がヴァネッサさんから聞いた話とは、ちよつと違うような気もする。

俺はお節介かなと思っただけ、言ってあげることにした。

「ダニエルさん、それは違うよ。あなたが笑っていないから、ヴァネッサさんも笑っていないなかったんだよ」

キョトンとするダニエルさん。さらに俺は続ける。

「傷の治ったヴァネッサさんを見たとき、ダニエルさんは笑顔だったんでしょ？ たぶんそれを見て、ヴァネッサさんもようやく笑顔になれたんだと思う」

ダニエルさんは少し考え込んだあと、静かにつぶやく。

「……そうなんですか」

「ヴァネッサさん、自分の未熟さのために負った怪我なのに、あなたに責任を感じさせてしまってるって言うてたよ。だから治してくれって」

「はっ？ あ、あの、ネスが？ いや、ヴァネッサがそう言ったのですか？」

「ダニエルさんが目を丸くする。ネスっていうのはヴァネッサさんのあだ名かな？ 結構仲良いみたいだな。」

「はい。ヴァネッサさんが本当に望んでいたのはあなたに笑顔が戻ることで、自分の目は二次、くらいの気持ちだったのかもしれないですね」

「俺がそう言うど、ダニエルさんは急に慌てだし——」

「はっ、え、いや、ありがとうございます。では、失礼します」

「と言って診療所から出ていった。」

「用事が済んだというのもあるんだろうけど、気恥ずかしかったのかな。今更なんだけど、よくあの体格で出入りできたな。」

「スミスさんは優しいげな笑みを浮かべると、戸口に立つダニエルさんから俺に視線を移した。」

「ん、終わったかな。じゃ、僕の番だね」

「そして、声をひそめる。」

「ちよっと二人で話したいんだけど……」

「ん？ なんだろ。」

特別な事情がありそうなので、俺は不思議そうな顔をしているミラに、席を外してくれるよう声をかける。

「ミラ、今日は昼ごはん一緒に行けないから、みんなで行ってきてくれる？」

「うん、わかった」

「素直にうなずくミラ。うんうん、良い子だな。」

「はい、これで食べてきてね」

「ミラにお金を渡して、頭を撫でてから送り出した。ミラが出ていったのを確認すると、スミスさんが外にいるダニエルさんに告げる。」

「ダニエル、今から誰も部屋に入れるなよ」

「はっ、この扉は誰も通しません」

「一度診療所に顔を出したダニエルさんはさっきのオドオドした様子から一変して、厳しい雰囲気になっっている。」

「スミスさんがニコリと笑って俺に言う。」

「さてヒデ君。これから連れてくる人のことなんだけど、何も聞かずに治療して、終わったら忘れてくれると嬉しいかな」

「うーむ、どうやら相だな訳ありらしい。」

「ってことは、病気なんですか？」

「うん、大聖堂の大司教様でも治せなかったんだよ」

入り組んだ事情はありそうだけど、治療を断るわけにはいかない。

「わかりました。患者さんをここに連れてきてください」

俺が言うと、スムスさんは微笑んだ。

「ありがたい。じゃ、連れてくるけど……そうだ、ここ、もうちよつと場所空けてくれる？」

言われるままに、机や椅子を動かす。

自然と俺だけが働いてしまった。スムスさんは口だけで手伝ってくれませんでした。

「うん、いいかな。じゃ、行ってくるね」

——シュンツ。

そう言うが早い……スムスさんは一瞬で消えてしまった。

どこかにワープしたらしい。

これだけのスペースを作ったし、相当大きな物ごと来るのだろうか。スムスさんが戻ってきたときに巻き込まれないように、俺は端に寄っておく。

すると突然、俺の目の前に巨大な天蓋付きのベッドが現れた。

でけー！ こんなでつかいと布団を作るのも大変そうだな〜などと考えていると、ベッド横に立っていたスムスさんが話しかけてきた。

「ヒデ君、お願いするよ」

「はい、わかりました」

……ここからじゃ顔さえ見えない。

ぐるりと回って頭のほうまで行って覗き込んでみると、男性がベッドの真ん中で半分埋まって眠っていた。

老人とまではいかないだろうが、衰弱しているせいか、とても弱々しく見える。

……この病気があれだよな。顔を見ただけで、なんとなくわかった気がした。

「とりあえず診てみますね。診断」

『悪性の腫瘍が全身に転移して臓器を蝕んでいます』

《やっぱり。治るよね？ 治せるよね？》

『可能です。10分ほどかかります。あと、治療にはマスターの魔力の大半を消費しなければなりません』

《大半の魔力か……わかった》

俺は一息ついて、スムスさんを見る。

「スムスさん、病気は治りますよ」

「うん、ヒデ君ならそう言うってくれると思っていましたよ」

スミスさんが頭を下げた。

「頼む。報酬ほうしゅうはなんでも用意する。父を助けてくれ」
スミスさんのお父さんだったんだ。

「はい、了解です。ただ少し時間がかかるのと、治療が終わったら俺、倒れちゃうかもしれないんで、よろしくお願いします」

「ヴァネッサ、聞いたな」

「はっ、ヒデ殿をサポートします」

あ、いつの間にかヴァネッサさんがいた。デカイベッドばかり気になって目に入ってなかったけど、一緒にワープしてきたらしい。

「では、治療をはじめます。診断」

『排除ちゆうと治療ちゆうを繰り返し行います。サーチは私が受け持ちますので、腫瘍の切除と治療をお願いします』

《わかった》

目の前のコンソールに目を向けると人体の3D映像が見えてきた。身体に赤い点がたくさん浮かんでいる。

《この赤い点を消していくんだね？》

『はい、お願いします』

赤い点を一つひとつ消してはヒールをかけていく。細々こまごました点がたくさんあったので気が遠くするような作業だったが、なんとかかすべて綺麗に消すことができた。

10分間とはいえ、その時間はものすごく長く感じられた。

《終わったかな？》

『はい、すべてクリアです。お疲れ様でした』

俺は、待つていたみんなに告げる。

「終わりましたよ」

「ヒデ殿、大丈夫ですか？」

ヴァネッサさんが心配そうにこちらを覗き込む。

「はい、大丈夫です」

「でしたらなぜ、ヒデ殿は泣いているのですか？」

「え？」

頬に手を当てると、たしかに濡れていた。

「本当だ。なんで泣いてるんだろ？ ……あ、そうかそうだった。じいちゃん、治ったよ。良かったね……」

俺のじいちゃんは同じ病気で世界したんだった。

口にした直後、俺の意識は途切れてしまった……

◇ ◇ ◇

目が覚めると、見覚えのある診療所の天井が目に入った。どうやらベッドに寝かされているらしい。

「あれ、寝てた、なんで？」

「ヒデ殿、気分はいかがですか？」

ヴァネッサさんがベッドの脇に控えていた。俺の様子を見てくれていたみたいだ。

「ヴァネッサさん。あ、倒れちゃったのか、俺。患者さんは？」

「陛下——ゲフンゲフン、ご老公様は若と先に戻られました。若は落ち着いたら戻ってくるこのことです」

今、陛下と言ったような気がしたけど、治療前にスミスさんと交わした約束を思い出し、流すことにした。

「なるほど、ご老公様はお目覚めになりましたか？」

「いえ、自分が最後にお見かけしたときはまだ。ただ、とても良い顔色をされていました」

「そうですね、良かったです」

すると、ヴァネッサさんが切り出した。

「ヒデ殿、先ほど倒れる前に涙を流していたことを覚えていますか？」

もちろん覚えてる。そして、自分が泣いてしまった理由もわかっていた。俺はそのときの気持ちを思い出すように言う。

「……覚えてます。俺の祖父は同じ病で亡くなっちゃったんですよ。それで、なんか重なってしまっただけ」

ヴァネッサさんは、俺に同情するような表情を向ける。

「なるほど、そういうことでしたか」

「じいちゃんは救えなかったけど、同じ病のご老公様は救えました。それで満足です。亡くなってしまった人はどんなに頑張っても戻ってきません。でも、生きてる人は治せます。俺の力は、そのためのものなんです」

「感服いたしました。今のお言葉、胸に刻んでおきます」

そう言つてヴァネッサさんは、ベッドに横たわる俺をじつと見つめるのだった。

3 再び若様(2)

「お、ヒデ君、起きたのかい」

いきなりスムスさんが部屋に入ってきた。いつも唐突どうとうに現れるよな、この人。

俺はスムスさんに謝る。

「あ、すみません。話をする前に倒れてしまつて」

「気にしないでくれ。ありがとう、父は目を覚ましたよ。とても晴れやかな気分だそうだ」

「そうですね、良かったです。ただし、この病気はまだ安心できません。再発の恐れがあるんです。だから、もしまた異変があつたらすぐに来てくださいね」

スムスさんは真剣な表情でうなずくと、またいつもの笑顔に戻つた。

「うん、わかつたよ。本当にありがとう。君はものすごいことをやってのけたんだよ」

「フフフ、俺は、病気を治しただけですよ」

俺が笑いながらそう言つたところ、スムスさんがそつと顔を寄せて耳打ちしてきた。

「詳しくは言えないが、父の命が救われたことは大きな意味を持つ。父が存命ぞんめいというだけで抑止力

になつていたのに、ここまで回復すれば現場へ復帰できる。好戦派の連中は震え上がっているだろうさ」

そんなこと言つと、偉い身分の方だつて明かしてるようなものなんですけど……

隠して隠して、もつと隠して……

「そ、そうですね。俺は患者を治しただけで、難しいことはわかりませんから」

俺がそう言つと、スムスさんこと若様は顔を離して笑い声を漏らした。今更だけど、スムスさんつて名前は偽名だよな。

「クククツ、ヒデ君はやつぱり面白いな。僕らのこと、もうわかつているんだろ？」

「さあ、なんのことですかね？」

「そうなのかい？ 君が望めば、地位も名誉も好きなだけ手に入れられるよ？」

この人、もう隠すつもりもないらしい。

「フフ、なんのことかわからないですが、そんな高いところに行つちやったら、患者さんが見えなくなっちゃいますから」

「患者が見えなくなると困るのかい？」

若様は驚いたような顔をしている。

「若様、俺はこの街に来たときにね、自分の好きなことだけやっていくつて、今を楽しみむつて、決めたんですよ」

「その楽しむっていうのが、君にとっては治療なのか。いいなく、ヒデ君はすごくいい」

若様は感心したようにうんうんうなずいている。そして、何やら上機嫌になってさらに続けた。

「ヒデ君と話してるとなんだかりラックスできて、MPの回復も早まる気がするよ」

「フフ。ところで、レポートってやっぱり、MP消費が激しいんですか？」

ふと思いついて聞いてみた。若様っていつも突然現れるから。

「そうだね、僕だから連続で飛べるんだよ。でも、さすがにもうMP切れだ」

「それなら、フレッシュをかけてあげましょうか？」

「なんだいそれ？」

「MPの回復魔法です」

若様は相当驚いたらしく、目を見開いた。

「え、そんな便利な魔法があるのかい？」

「はい、はいきますよ。フレッシュ」

言葉で説明するのが難しいので、実際に使ってみせる。若様に手をかざすと、若様の身体からどんどん魔力が溢れていく。

「お、おお、MPが溜まっていくのがわかるよ。すごいなヒデ君は」

「フフフ、若様は人を褒めるのが上手ですね」

あ、そうだ。アクセサリー屋で覚えた付呪って、フレッシュでもできるかな？

「若様、今、銀の装飾品とか持ってないです？ 銀じゃなくても魔法伝導率が高ければ、なんでもいいんですけど」

「ん、銀のほないけど、ミスリルの指輪ならあるよ。伝導率は銀より良いはずだ」

「ちょっと見せてもらっていいですか？」

「ほら、これ。デザインが気に入ってるんだよ」

若様からミスリル製の指輪を受け取る。

「ありがとうございます。診断」

さっそく診断に、フレッシュの付呪が可能かどうか尋ねてみる。

『この質量ならランヒールとフレッシュ、両方とも付けられますよ』

『おお、二つも!? スゲーなミスリル。順番に練り込めばいいの?』

『はい、特に決まりは存在しません』

『了解、ありがとうございます』

「若様、これに魔法を付呪していいですか？」

俺が尋ねると、先ほどにも増して若様は驚きを見せた。

「え？ ヒデ君、付呪ができるの？」

「特定の物だけです」

「ぜひ、やって見せてくれ」

ぐいっと身を乗り出す若様。ち、近いって。

「はいはい、じゃ、いきますよ」

えーっと、指輪に練り込むようにだっけ。指輪に両手をかざしてフレッシュと念じると、指輪が眩まばゆく輝いた。

うまくいったみたいだな。この調子でもう一回、練り込むようにランヒールをかける。

指輪の輝きが増し、神々ことうしい光を放つ。

「はい、できあがり」

「え、もうできたのかい？ 前に知り合いの魔術師から付呪のやり方を聞いたときに、様々な薬品を使って魔力を込めるとか、とても手間がかかるものだと言われたんだけど……」

え？ そうなの？ 慌てて俺は言い訳する。

「あー、俺のは簡易版です」

「えー、あるのかい？ そんなの？」

「まあまあ、はいどうぞ。なかなか良さそうな出来ですよ。心配なら鑑定かんていのスキルがある人に見てもらってください」

「ヒデ君、君とは知り合ったばかりだけど、君のことは信じてるよ」

若様は俺が手渡した指輪を受け取ると、ためらうことなくそのまま指に付けた。

「お、お、おお、なんだ、身体がポカポカと温かくなってきたぞ」

「フフ、さっきのフレッシュに加えて、ランヒールっていう体力回復の魔法を付呪しておいたんですよ」

「なんと、付呪を同時に二つもだと。そんなの興味深すぎるよ！ ダニエル、入ってきてくれ」

診療所のドアが開き、外にいたダニエルさんが入ってくる。やっぱりデカいな、ドアがちっちやく見えるよ。

「はっ、お呼びですか」

「見張りは良いから、これを鑑定してくれ」

若様はそう言うと、ダニエルさんに指輪ごと手を差し出した。

ダニエルさんは、神秘的な光を放つその指輪を見つめて驚いていた。そして「かしこまりました」と重々しく言うと、若様の指から指輪を慎重に抜き取る。

「え、ダニエルさん、鑑定スキル持つてるんだ」

「ぜんぜんそうは見えないから驚いていると、若様が教えてくれる。」

「実はそうなんだ。そのうえ魔術にも精通してるんだよ」

え、巨人族のようなこの身体で？ 肉弾戦のほう得意なんじゃないの？

そう思っていると、ダニエルさんが不服そうな視線を向けてくる。

立ち読みサンプル
はここまで

「ヒデ殿はわかりやすいですね、顔に全部出ていますよ……お恥ずかしながら、昔、引きこもっていた時期がありまして、そのときに本を読み漁ったんです。当時は身体が小さかったのですが、急な成長期が来まして」

「ほ、ほほ」

人は見かけによらないものだな〜と感心しながら、指輪を鑑定しようとするダニエルさんを観察する。

そこで、ふと気になったので尋ねてみる。

「あ、そうだ。一つ聞きたいんですけど、鑑定したとき、食べられるか、食べられないかって出ませんか？」

鑑定スキルって大した情報をくれないくせに、食べられるか食べられないかはしっかり教えてくれるんだよね。

「食べ物を鑑定したことはほとんどないんですが……食用かどうかは出たことはありませんね」

「はい、ありがとうございます。なんでもないです」

俺の鑑定スキルだけだったか……

ダニエルさんは少しだけ不思議そうな顔を見ると、改めて指輪に注意を向け直した。

「では、若様、拝見します」

しかし、鑑定持ちがこんな近くにいるのに鑑定させずに指輪を付けちゃうなんて、若様って不

用心ようじんだよな。いや、これって若様の人心掌握じんしんしょうあく的な作戦なのかな、それともただの素すなのかな？

どちらにせよ、ちよつとだけ心配になってきたよ。陰謀とかに巻き込まれてほしくないな。

などと考えていたら、ダニエルさんが手にのせた指輪を凝視めいししながら――

「バカな……あり得ない……」

と口にして、わなわな震えていた。

どうでもいいけど、ダニエルさん手デッカ。んでもって、指輪チツサ。なんかすべての比率が狂うね。

若様が前のめりになって尋ねる。

「ダニエル、どうだ？ わかったか？」

「はっ、この指輪は、体力と魔力を徐々に回復させる効果を持っています。このような物は初めて見ました。伝説に出てくるアーティファクトのようです」

「え？ まさか？ そこまでじゃないでしょう？」

驚く俺。だって伝説とか急に言われても。

「いいですか？ そもそも回復系の付呪装備自体がレアなのです。加えてこの指輪、その効果は一回きりの使い捨てではなく、常時体力を回復してくれ、さらには魔力まで回復してくれる。さらに、すべての効果が魔力の補充なしに発動し続けるんですよ」

一言ごとにダニエルさんが、俺に詰め寄ってくる。